〈修士論文要旨〉

甘えの欲求不満への情動的反応における パーソナリティの影響に関する実証的研究

片　岡　瑞　恵*

Ⅰ　問題と目的

1．土居健郎による甘え理論とその応用

1）「甘え」の定義と理論

まず本研究を進めるにあたり、「甘え」の定義について述べていきたい。土居（2007）は「甘え」について「一度失われた母親と幼児の擬似的一体感の回復を求めること」としている（p 118)。これは、母親という対象がわかるようになり、母親と一緒にいようとすることで安心感を求めるが、赤ん坊の甘えが母親に何らかの問題があって赤ん坊の甘えを満たしてやれない場合に赤ん坊はその甘えが満たされないために安心できず、親に対して信頼感を持てない。そのために、親が一時的にでも自分のところから姿を消すと、そのことで別離不安を感じるようになるものだという（土居，1986；p 55)。また、土居は「甘え」の最も簡単な定義として「人間関係において相手の好意をあてにして振舞うこと」であるとも述べている（2001；p 65)。

2）「甘え」の欲求不満反応

さらに、土居（1987）は「甘えるというのは本来相手があって甘えるわけで、相手がなければ甘えることができず、相手が受け入れてくれるというところで初めて甘えが成立すること」を述べ、「よい関係があって初めて甘えるという感情が体験される」という。つまり、「よい関係がなくて相手がこちらを受け入れてくれない場合には甘えることができない。自然に甘えることができれば子どもは甘えたい欲求をそれほど意識しないが、甘えられないときにはかえって甘えたいという欲求が強くなる（p 3)。」とも述べている。

また、甘えることができなかった場合には容易に「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」といった心理になることも指摘している。そこで、私は実証的研究を通して、「甘え」の欲求不満（「甘え」が受け入れられなかったときに表れる「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」）に対する情動反応とパーソナリティとの関係について検証していきたいと考える。また、他者とのつながり方、対人関係に重きを置き、Bionの理論から対人関係を原子価としてとらえたHafsiの理論を交えて、甘えについて検証していきたいと考えた。この原子価を使用する有効性として、今までに見てきたような甘えの定義を鑑みて、甘えは相手との相互的なつながりが必要となることから、人と人とのつながり方を測定する原子価を使用するのが適切であると考えたためである。

平成21年度　*社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）

以下に原子価理論について述べていきたい。

2．原子価理論

Hafsi（2007）によると、Bionは対人関係や個人とグループの関係の結合を科学の概念である「原子価valency」から説明しようと試みた。原子価は科学の記号から代用した言葉で、具体的に述べると、化学物質であるCO_2がCとO_2とで手をつなぐように結合している原子価から、人と人との繋がりの喩えとして引用されたものである。即ち、Bion（1961）は人間も原子と同じような原子価を持ち、原子同士のように原子価によって結合すると考え、原子価を「独立した行動パターンを通じて他者と瞬間的に結合する個人の能力」（p 175）とし、「基底的想定（basic assumption）を創り出したり、それに基づいて行動したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態（readiness)」（p 116）として定義している。

Hafsi（2006, 2007）によると、Bion（1961）は原子価の類型について述べていないが、幾つかの論述からの示唆によると、原子価のタイプは基底的想定と同様であり、「依存dependency」、「闘争・逃避Fight/flight」、「つがいpairing」が存在するという。その後、Bionの集団論に基づく様々な実証的研究を行ってきたStock & Thelen（1958）は理由を述べずに、「闘争」と「逃避」に分離させ、4つのタイポロジーを提案した。後に述べるように、闘争と逃避には共通の特徴があるが、1）対人関係の持ち方、2）グループ状況に対する反応、そして3）それぞれの原子価と関係のある病理から見た相違もあるので、Hafsiもこのようなタイポロジーを用いている。

Hafsi（2006, 2007）によると類型に関して、もう一つ以下のようにHafsiによって唱えられた。前述のように、4つの原子価が存在し、人は全ての原子価を出すことが可能であるが、1つの主要な原子価すなわち「活動的原子価」があるとHafsiによって述べられている。また、他の3つの原子価は「補助的原子価」と呼んでいる。「活動的原子価」とは対人関係において頻繁に示す原子価で、「適応機能」があり、「補助的原子価」とは何らかの理由で活動的原子価の表現が不可能な場合に用いられる原子価で、「補助的機能」があると考えられる。即ち、人は補助的原子価を用いることによって、関係を維持し、変化に対する防衛的手段として用いることになる。

3．目的

これまでに、甘えと原子価について述べてきた。以上の理論を踏まえ、本研究の目的は甘えの欲求不満に対するそれぞれの情動的反応とパーソナリティ（特に対人関係におけるあり方、あるいは原子価）との関係を明らかにすることである。

4．仮説

本研究では以上の目的をふまえて、次のような仮説を立てていきたい。

まず、依存の活動的原子価を持つ人は様々な意味で他者が自分より優れていると無意識的、意識的に考えるので、人と繋がるために人を頼っていくしかないかのように振る舞う傾向にある。逆に、自分より劣っているとみなされる相手には自分と同一化し、共感し、依存を受け入れ、満たそうとする。したがって頼りにしたいまたは頼りにされたいという依存的な関係によって繋が

ろうとする傾向があるので、頼りにしたい時に頼りにできないと素直に甘えられないことに欲求不満を感じ、不平がましい態度をとり、「すねる」傾向が強いだろうと仮説を立てた。

次に、つがいの活動的原子価を持つ人は親しい対人関係を好み、人と個人的なレベルで付き合いたいという願望があったり、大集団より小集団を好む傾向があったりする傾向がある。よって、自分と仲の良い人が他の人と親しく接していると、自分が不当な扱いを受けているかのようにねじ曲げて考えてしまい、「ひがむ」傾向が強いだろうと仮説を立てた。

また、逃避の活動的原子価を持つ人は、過剰な遠慮をしたり、人との間の距離感やプライバシーを重視したりする傾向がある。そして、葛藤を対人関係における破壊的な要因として体験するので、葛藤のない対人関係を好む傾向がある。さらに、関係を維持するために、人との間に心理的または物理的な距離を置く傾向がある。感情的な対立を避けようとし、一見、内向的で冷たそうに見えるため、甘えたいのに甘えられない時には甘えようとはせず、相手に背を向けようとし、「ひねくれる」傾向が強くなるだろうと仮説を立てた。

闘争の活動的原子価を持つ人は批判したりするために他者との接触を求めるかのように見え、他者に甘えるということは話し合うといったようなコミュニケーションのつながりを求めることが考えられる。つまり、他者と議論がなされないと拒絶されたような気がして、欲求不満を感じ、高い競争心からも甘えられない相手に対して敵意を向けてしまうのではないかということで、「うらむ」傾向が強いと仮説を立てた。

以上の問題を踏まえて、実証的研究を行いたい。

Ⅱ　方　　法

本研究では以上の仮説を検証するために、以下のような方法で分析を行った。

1．調査対象者

大学生を対象に実施した。分散分析には原子価のデータのある人のみを使用した。

2．尺度

1）甘えの欲求不満に対する反応尺度

本研究は質問紙調査の作成にあたり、予備調査を行い、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」のそれぞれに対し、「それはどのようなものですか。また、どのように感じますか。」という質問をし、言葉のイメージについての回答を求めた。予備調査を行った目的としては辞書的な意味ではなく、学生が考える「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」のイメージがどういうものかを調べるために行った。

上記の言葉のイメージの解答例を基に、5件法による質問紙を作成した。

2）VAT（Valency Assessment Test）

Hafsi（1997, 2004）によると、VAT（Valency Assessment Test）はBion（1961）の理論に基

づいて開発した文章完成法のテストをHafsi（2010）が日本語訳し、奈良大学版として開発したものである。VATの目的はグループ状況に対する反応やBionのいう「原子価Valency」を測定することである。本研究の対人関係を測る尺度としてはこの尺度を使用する。

協同指標を除く、4つの原子価の平均点が一番高いものを対象者個人の持つ活動的原子価として使用する。

3．手続き

授業の最後に本調査（甘えに対する欲求不満尺度）に関する質問紙を配布し、回答を終えた者から順に回収した。

Ⅲ 結　果

本研究において用いた分析は信頼性分析、因子分析、そして分散分析である。

結果から得られたデータを用いて考察を加えた。

Ⅳ 考　察

1．一元配置分散分析の結果から

まず、一元配置分散分析の結果から第1因子の「うらむ」は4つの原子価の中において闘争が最も平均値が高いという結果になった。よって、闘争の原子価を持つ人は「うらむ」傾向が強いという仮説が検証された。また、第2因子の「すねる」は4つの原子価の中において依存が最も平均値が高いという結果になった。よって、依存の原子価を持つ人は「すねる」傾向が強いという仮説が検証された。

2．本研究の効果

この研究の効果としては、クライエントが具体的にどういう反応を示すのかを予測することもできるようになるだろう。

3．今後の課題

この研究の弱点としては、被験者が少ないこと、特につがいと逃避の原子価を持つ人の人数が極端に少ないことが挙げられる。今後、データ数を増やすことでより信頼性と妥当性の高い結果を出せるようにしていきたい。また、半構造化面接を取り入れることによって、さらなる回答を引き出すことで、今回の質問紙の項目には含まれていなかった項目を増やしたいと考える。